

亀田収容所（函館第2派遣所）メモ （ロバート・バートン・ヒアさんが収容）

45.3.13 亀田郡亀田村字港（現・函館市亀田港町）に開設。台湾から大皇丸で移送された捕虜 130 人（主に英兵、何人か米兵）を収容。

45.6.7、閉鎖。捕虜は空知郡赤平の函館第2分所へ移送。収容中の死者 4 人（英）

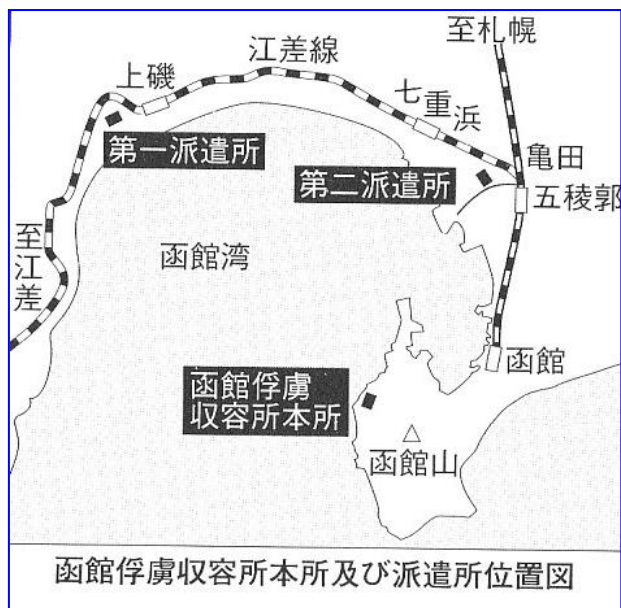
●所長は天童二郎大尉。彼は第1派遣所長も兼務。他の職員も兼務が多かった。

●前任将校は W.F.フランシス大佐（英）。捕虜軍医はおらず、英将校の A.T.ゴート中尉が病院付将校に指名された。

●捕虜宿舍は、国鉄五稜郭駅から有川埠頭に向かう支線の近くの木造2階建ての建物（函館港運所有）。ヒア氏の手記によると、彼にとって6番目の収容所だったが、ここが最も清潔で居心地の良い場所だったという。

●捕虜は憐函館港運の荷役として、主に貨車で有川埠頭まで送られてきた石炭の運搬作業に従事した。その他、木枠コンテナ入りの缶詰や乾物などの積み下ろしもあり、捕虜たちは損傷した木枠から缶詰などを取り出して、こっそり収容所に持ち帰り、美味にありつくこともあったという。

●ゴート中尉の記録によると、捕虜たちは長旅と寒さのため健康状態がきわめて悪かったが、この時期の函館本所長は人道的な捕虜取扱で知られる江本中佐（44.3～45.5）だったお陰で、本所から第2派遣所に毎日回診に来た岡村軍医は赤十字の医薬品をふんだんに使って治療に当たることができた。ゴート中尉の要請で、岡村軍医は捕虜全員の健康保持のため食料改善を江本中佐に働きかけ、病院の患者にはパンやミルク、卵が支給され、捕虜たちに少量の日本酒も出るようになった。また赤十字慰問品は1人1包が支給された。しかし、それでも最初の2ヶ月で4人が死亡した。



現在の収容所跡地



捕虜たちが働いた有川埠頭

（文責：笹本妙子）